

第Ⅳ部門 道路環境と景観の評価に関する一考察

四 国 学 院 大 学 正 会 員 植 原 正 博
 明 建 技 術 コ ン サ ル タ ン ツ (株) 中 川 芳 計
 明 建 技 術 コ ン サ ル タ ン ツ (株) 正 会 員 角 谷 利 哉
 明 建 技 術 コ ン サ ル タ ン ツ (株) ○ 正 会 員 奥 西 一 裕

道路景観の評価は、観測的な方法、景観特性の抽出による方法、差分評価モデルを用いる方法、点数加算法による方法、主観点客観点の相関による方法、イメージの抽出による方法など、さまざまな方法があげられる。

これらの評価の方法のうち、「情緒性」にかかわりあいがあるものとして、複数の評価尺度によるSD法(Semantic Differential method)がある。

演者らは、昨年にひきつづきテストシートを用いたSD法により、京都と滋賀を結ぶ「山中越え道路」の道路景観の調査を行い若干の知見を得たので報告する。

1. 調査方法

調査時期 平成7年7月

調査者 10名(男性8名、女性2名、年齢30～40歳)

調査方法 テストシートを調査者に配り、出発点より前方道路方向を眺望し、シートの項目毎に点数を記入する。

シートの項目を記入後200m前進し、前方と後方を眺望し、同様の記入をする。

以後、同じ動作を繰り返して、2kmの調査を行った。

現地調査 周辺地形図と住宅地図を参考に、昨年実施した調査と同様に現地調査を行い、眺望の対象となる主要な事物を記載した現況マップを作成した。

2. 調査結果と考察

調査終了後、それぞれの眺望地点毎に平均点を算出した。

本路線の景観を代表する区間として、一般住宅地と一般商店街があり(図-1, 2)さらに、特異な区間として高架橋下がある。(図-3)

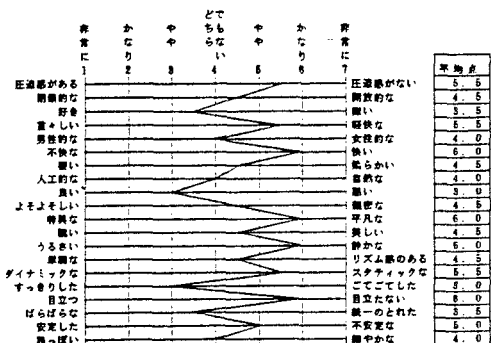


図-1 一般住宅地付近

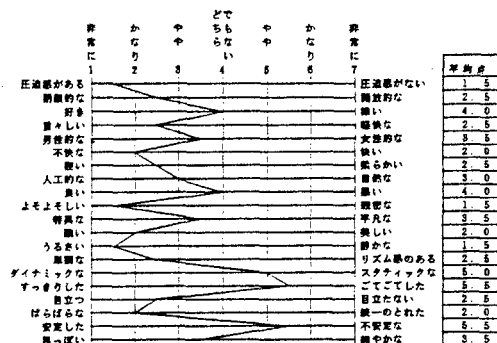


図-2 一般商店街付近

Masahiro UEHARA, Yoshikazu NAKAGAWA, Toshiya KADOYA, Kazuhiro OKUNISHI

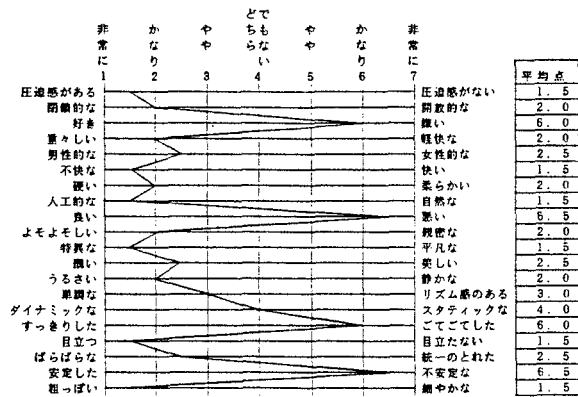


図-3 高架橋下付近

テストシートの項目のうち、景観の評価性にかかわりあいがある項目は、「好き-嫌い」「不快-快い」「良い-悪い」「醜い-美しい」「ばらばらな-統一のとれた」「安定した-不安定」の6項目があげられる。

この6項目について考察を行えば、一般住宅地付近がバラツキが最も少なく、次いで一般商店付近、高架橋下付近となっている。

これは、一般住宅地付近では少ないながらも生垣や庭木などがあるのに対して、一般商店付近では無造作に立てられた看板や広告類が多く、さらに交差する電線や数多い電柱などが景観に不快感を与えているものと考えられる。

特異地点としての高架橋下付近では、評価点が全区間中で最も悪い結果となった。

この原因は、高架は景観を眺望するうえで常に圧迫感を与えるものであると考えられ、昨年の調査結果と類似していることが認められた。